

「大きな喜び」

ルカによる福音書 2 章 8-20 節

私たちの人生には、個人の努力や頑張りではどうすることもできないことがあります。誰もが、多かれ少なかれ、そんなどうすることもできない状況の中で生きています。羊飼いたちも、自分たちではどうすることもできない状況の中に置かれて、そこで生きていました。

羊飼いは、羊の番をし続けるために、人の住んでいる集落の中ではなく、その外側で生きることを余儀なくされていました。また彼らは、一人の人間として正当に扱われることもありませんでした。人口調査の対象にもならず、夜通し休みなく羊の番をさせられ、その命は、羊の命よりも粗末に扱われていたのです。そのうえ、安息日の礼拝にも行けず、人々からは律法を守らない「ダメな奴」と軽蔑されていたのです。羊飼いたちは、社会的にも宗教的にもみんなからさげすまれ、誰からも相手にされない孤独な人たちでした。そのことは、彼らにとっては、どうすることもできないことだったのです。

そんな羊飼いたちに天使が現れ、「あなた方のために救い主が生まれた」と告げられました。主の栄光が彼らを照らした時、彼らが抱いた感情は大きな恐れでした。自分たちは、神さまからも見放された存在なんだと思っていた彼らは、裁かれると思ったのです。けれども、天使は言います。「恐れることはない」と。羊飼いたちに告げられたことは、裁きではなく救いでした。天使は、「あなたがたのために救い主がお生まれになった」(11 節)と言いました。それを聞いて羊飼いたちは、とても嬉しくなりました。

世の中の人みんなから冷たくされても、羊の命より軽い命だと思われていても、自分ではどうすることもできない状況に生きていても、「神さまはちゃんとわかってくれていたんだ」、こんなに小さくて弱い存在の自分たちのことも、ちゃんと覚えてくださったんだって、羊飼いたちはそのことを喜んだんです。だから、すぐに駆け出して、イエスさまに会いに行ったのです。

では、その羊飼いたちが、飼葉おけに寝ているイエス・キリストに出会ってから、その後の彼らの生活、彼らを取り巻く状況は何か変わったのでしょうか。いいえ、彼らの生活は何も変わることはありませんでした。どうすることもできない状況は、そのままでした。救い主が生まれたからといって、またそれを見に行ったからといって、何か劇的な奇跡は、何も起こらなかった。過酷な生活は何も変わらなかったのです。だけど、羊飼いたちの人生は全く新しいものに変えられました。彼らは「神をあがめ、賛美しながら」帰って行ったというのです。

どうして、そんなことが出来たのでしょうか。それは、羊飼いたちが、一番の喜びを発見したからです。羊飼いたちは孤独な人たちでした。誰からも愛されない、神さまからも見捨てられた存在だと思って生きてきました。でも、そうじゃなかった。主の栄光に包まれた時、「あなたは私にとってかけがえのない大切な存在だよ。あなたは私に

とって高価で尊い。私はあなたを愛している」、そう言われる神の御心を知ったのです。神さまが望まれるのは、裁きではありません。滅びよりも私たちが生きを願われ、神さまは私たちを救うために、ご自分が最も大切にしておられる独り子イエスさまを、この世に送って下さったのです。

その神さまのひとり子イエスさまは、自ら人間となって、とても清潔とは言えない家畜小屋で産声を上げられました。しかも飼料おけに寝かせられたのです。

イエスさまは、ご自分がこのような状態でお生まれになることで、この世でどんなに低く、どんなに貧しい境遇に置かれた人にとっても、大きな苦難や苦しみ、不安の中に置かれている人々にとっても、私は、あなたのその苦しみや悲しみを自分自身が自ら体験した者として、あなたと共に担うことができる。私はあなたと共にいる。あなたは一人ではない。そのことを、お生まれの時から私たちに表して下さったのです。

これが、救い主と「出会う」ということではないでしょうか。そして、その出会いが大きな喜びとなり、私たちの生きる力となるのです。